

# 新北海道史

第二卷  
通説一

無<sub>レ</sub>掘<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>事」といい、メナシにも「乙名共女房並妻其外ウタレ共の女房へ番人共相對又は無<sub>レ</sub>体<sub>レ</sub>に仕<sub>レ</sub>かけ、数度の不<sub>レ</sub>將<sub>レ</sub>」があつたといつてゐる。寛政乱後反夷を取り調べた時の口書にも、番人とメノコとの密通事件が数多くあげられていて、その乱の有力な原因の一つをなしたことを物語つてゐる。木村謙次も寛政四年の記行、北行日記に「蝦夷地に往來する舟子など、蝦夷女を姦淫する事あれば、其女己が夫（アイノ）に告ぐ、其夫舟に來りて其人を求め出して償の物を出さしむ。煙草など軽き數を備へて之を償ふ。又其初犯すとき、面に炭をぬり、又眇目のまねになりて犯し、償を責に來りしとき、一面を洗ひ、目を開き、見ちがひする事もあれども、如<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>奸<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>も夷人もはや解悟すると云」といふ、こゝろしたことが普通に行なわれていたらしい。

寛政蝦夷乱の原因として蝦夷達が数えあげてゐる、蝦夷人ももし働かないときはこれを残らず毒殺してしまひ、内地人を呼寄せて今の蝦夷村に町屋をこしらえるとか、粕とともに締め殺してしまふとか、粕釜の中で煮殺すとか、土藏の底に針をうえ、板を吊り渡し、その上で蝦夷人も酒盛りをさせ、酔つたところを吊板を落して皆殺にするとか、いふたような兇戯に類する出稼人達の冗談が、かれらの間には生死にかかわる大問題と考えられたのも、平生内地人の蝦夷に対する態度がそれをしかなないほど残酷なものであつたことを物語るものである。

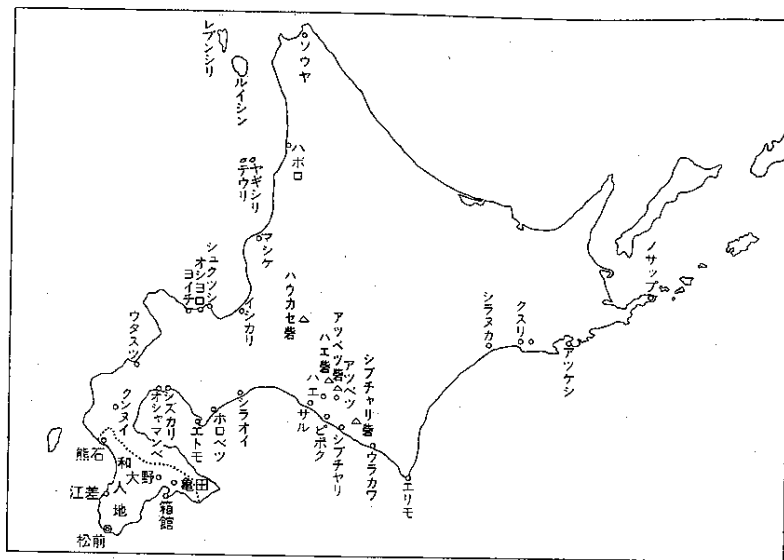
### 第三節 蝦夷の反乱

#### 一 寛文九年の蝦夷乱

「染退蝦夷と波恵蝦夷との争鬪 和人の蝦夷地における経済活動が盛んとなるにつれ、漸次蝦夷に対する圧迫が強化され、兩者の間に利害の衝突をみるにいたつたのは当然である。松前藩成立以後寛永二十年に西蝦夷地の酋長（瀬田内の乙名か）へナウケが乱をなし、蠣崎右衛門利広を瀬田内につかわして平定したが、その詳細はわからない。利別川の砂金が開かれて多くの出稼人が入り込んだからではないかと思われる。寛文九年の蝦夷乱は、和人の交易上の不正、蝦夷の自由移動ならびに交易に対する制限、和人出稼人の扇動、松前藩の蝦夷地に対する放任主義などの原因が重なつておきた大乱であつたが、そもそも東蝦夷地における染退蝦夷と波恵蝦夷との争鬪が始まりであつた。

慶安元（一六四八）年東蝦夷地染退の蝦夷（メナシクルという）波恵の蝦夷（ハニクルという）とが衝突した。染退の脇乙名シャクシャインは、力衆にまさり、衆夷を威服していたが、波恵の乙名オニビシもまた器量これに劣らず、兩者相拮抗していた。この年シャクシャインとオニビシとが會つて酒宴を開いた際、シャクシャインは酔に任せてオニビシの部下一人を殺害した。そこでオニビシはシャクシャインに償品つぐなひを出してわびさせようとしたが、シャクシャインはこれに應ぜず、ついに戦いとなつた。

松前藩はそれが波及拡大するのを恐れ、また蝦夷交易が妨げられるのを心配して使者をつかわし、たびたび和解させようとしたが聴き入れられず、争鬪は続いて前後六年間に及んだ。その間に、オニビシに応援するものがしだいに多くなり、承応二（一六五三）年春ついに染退の蝦夷を破り、総乙名カモクタインを殺し、シャクシャインもまた危くなつた。そこで時の藩主松前高広は家臣佐藤権左衛門、下国内記をつかわし、オニビシをさとして和解を勧告し、オニビシの承諾を得、シャクシャインを説いて、双方に米、酒、器具などを与えて和睦させたため、争乱はしばらくやむこととなり、明暦元（一六五五）年には二酋長がそろつて福山に上り、高広に謁して他意のないことを誓つた。



寛文蝦夷乱関係図

シャクシャインはカモクタイン戦死後、代って染退の惣乙名となったが、若年のころからたびたび戦場に臨んでも微傷も受けず、そのうえ形勝の地を占め、財力に富み、家筋もよかったので、衆夷の崇敬を受け、数年ならずして勢力を回復したから、寛文二年ふたたびオニビシと争いを起すようになった。同五年夏、藩主高広は家臣下国内蔵丞をつかわし、さとして和解させたが、両者の感情はことごとくに衝突し、同七年染退の蝦夷がまたオニビシの部下一人を殺害するにいたった。オニビシはこれに対して償品を求めたが、シャクシャインは言を左右にしてこれに応ぜず、両者の対立はますます尖鋭化していった。

そのとき砂金採取のために和人が多く染退に来ていたが、坑首の文四郎という者は、この形勢を心配して藩主の許可を受け、双方の間に立って和解せよと努めた。同八年四月二十日オニビシは文四郎を訪れたが、文四郎の住家は染退川の西側の原野に、方百間ばかりの土塁を築いてその中に建てられてい、染退川東岸の岡の上にあるシャクシャ

インの砦から見通すことができたので、シャクシャインはこれを見届け、翌二十一日部下数十名（あるいは二百人という）を率いて、文四郎の家を囲んだため、オニビシは戸外に出て奮闘し、ついにはなばなし最後を遂げた。

オニビシの死後、その残党波恵のチクナシ、ピボク（後に新冠という）のハロウなどはその仇を討とうと、しばしば間者をつかわして様子を探っていたが、六月下旬に松前の商船が染退に着き、その地の蝦夷達は酒を得たので痛飲し、大酔していると聞き、チクナシなど数十人が夜に乗じてこれを襲い、敵の新しい砦に火を放ち、混乱に乗じて数十人を殺傷して引き上げた。オニビシの姉は沙流の蝦夷ウトマサ（あるいはウトウという）の妻となっていたが、すこぶる勇気のある婦人で、弟のために復讐しようと思慮に帰ったが、波恵の砦が要害として不適當であると考え、あらたに厚別川あつべつの岸に新しい砦を構えてこれに拠った。シャクシャインはこれを知り、染退、浦川の蝦夷をつかわして襲撃させたが、チクナシたちは迎え撃って撃退した。しかし七月中旬になってふたたび来襲した時は、厚別の蝦夷は多く食料採取に出ていて砦に残っていた者が少なく、防ぎかねてオニビシの姉は戦死し、残る者は山中にのべられたので、敵は家を焼き、器物を奪って去った。

厚別の砦が破られてから、オニビシの一族はちりぢりになり、その勢力は急に衰えたので、チクナシ、ハロウなどは残念に思い、十二月ハロウは松前に上り、藩にこの顛末を述べて、兵器、糧食などを貸与してもらいたいと願いだしたが、松前藩は昔から蝦夷の争いに、一方を援助した例がないといって許さず、二党のために調停の勞をとることを約束し、米や酒などを与えて帰らせた。翌九年四月沙流のウトマサがまた松前に上って兵器、糧食の貸与を願ったが藩はこれも許さず、ウトマサを松前にとどめ、人を沙流および染退につかわして双方を論し、仲裁の勞をとろうと申し入れさせた。ハロウだけはシャクシャインが異志を懐いていることを知っていて同意しなかったというが、双方と

もにこれを承諾し、証拠として物品を提出した（蝦夷には文字がないから、宝物などを出して偽らない証拠とした）。そこで藩はウトマサに米や酒を与えて帰らせたが、不幸途中で痘を患い死亡した。

蝦夷の反乱およびその討伐 シャクシャインは松前藩の仲裁に対し、表面は承諾の意を表わしていたが、心中にはひそかに謀反を企てていた。その時、越後の庄太夫、庄内の作右衛門、尾張の市左衛門、最上の助之丞など四人は、数年来鷹待として蝦夷地に滞在していたが、シャクシャインの味方となり、ことに庄太夫はシャクシャインの娘と通じ、シャクシャインともっとも親密だったので、これを援けて松前氏を滅ぼし、諸国通商の利益を自由にしようとして、その腹心となつて画策したという。シャクシャインは、まずオニビシの残党を懐柔するため、ウトマサが松前に行つて死んだのは毒殺されたのである、われらは松前を討つて、ウトマサの仇を報ぜねばならぬとの流言を放つた。これによつてオニビシの残党中にもシャクシャインに味方するものがでてきた。

一方シャクシャインはまたチメンバなる者を西蝦夷地に、ウエンシルシという者を東蝦夷地につかわし、各部落を回らせ、松前の処置は年をおつて不法をきわめているが、いまやわが種族の絶滅を企てていて、現に沙流のウトマサは松前におもむいて毒殺された。今年蝦夷地に来る商船の貨物にはみな毒が入れてある。ゆえに樺太島、ラッコ島の夷人までも力を合わせて蝦夷地にある鷹待、舟子、鉾夫などを殺し、米憎を奪つて兵糧に充て、松前に攻め上り、シヤモ（和人をいう）を一掃し、この難を免れようと思う、もしこれに同意せぬ輩があれば、シヤモより先に殺してしまふと、扇動したり強要したりし、そのために各地の蝦夷は多くこれにくみし、六月各地で和人を襲つて殺害し、略奪をした。

襲われた商船は東蝦夷地で十一隻、西蝦夷地で八隻、その他三十二隻は姿を聞いて松前に引き返した。略奪が行な

われたのは西蝦夷地ではウタスツ（今の後志志地方寿都郡）からシクツシ（今の小樽市）にかけての各地ならびにマンケ（増毛郡）であつて、石狩はこれにくみせず、宗谷およびルイシシ（今の利尻）におもむいた商船四隻は無事に交易をして帰り、その内一隻はエブリコという所（樺太）に行つてエブリコを積んで帰った。東蝦夷地ではホロボツ（胆振地方幌別郡）からシラヌカ（釧路地方白糠郡）までの各地で、釧路以東の蝦夷もこの反乱にはくみしなかつた。これらの諸地方は和人との関係がまだまだ密接ではなかつたのであろう。殺害された和人は船子、鷹待などで、東蝦夷地で百二十人（このうち土十三人）、西蝦夷地において百五十三人（このうち土二人鷹匠三人）計二百七十三人であり、東蝦夷地において七人、西蝦夷地において十五人計二十二人は、同じく襲撃を受けたがかるうじて免れた。なお殺害された者のうち百九十八人は他国人であつた。

東蝦夷地の変報は六月二十一日、松前に達したので（西蝦夷地の変報は七月五日に到達した）、藩はただちに士卒を、当時砂金掘が多く入り込んで、その上要害の地であつた国縫（今の山越郡長万部町）につかわしてこれを守り、かつ夷情を探らせ、またこれを江戸に報告した。ときに藩主矩広は蔵わずかに十一にすぎず、とうてい軍を指揮することができなかつたので、幕府は矩広の従祖父松前八左衛門泰広（公広の三男で正保三年幕府に仕えた）に命じて代つて乱の平定に当らせた。ところが七月二十五日反夷どもがエトモ（今の室蘭市）まで攻め上つたとの報が国縫から達したので、翌日家老蠣崎藏人広林は兵を率いて福山を出発し、八月一日国縫に着いた。松前藩は兵士が少ないので、雑兵には漁民、鉾夫などが少なからず混つていた。反夷は、これらの到着に先立って国縫に攻め寄せ、七月二十八日以来、毎夜岩に近づいて火をかけようとしたが、守備の者は銃を放つて近づかせず、そのうちに本隊が到着したので四日、六百二十五人（うち鉾夫百六十一人）が三隊に別れてモンベツ（今の山越郡長万部町の内）の夷賊を討ち、

進んで長万部に至って夜営した。蝦夷は軍を見ると山中に隠れ、毒矢を放ったので、こちらも小銃を放ってこれに応じた。翌五日には進んでシツカリ（今の虻田郡豊浦町礼文華の西方）に至り、有珠の蝦夷九人を生捕りにし、数人を射殺して国縫に帰った。反夷は遠征で兵糧に乏しいうえ、銃によって味方の多くが死傷したので、意気を失い退却してしまった。

こうするうちに泰広は江戸を出発して十日に福山に着き、二十一日国縫に達し、亀田に風待ちを待っていた兵糧船も到着したので、九月四日松前の兵は船に乗って国縫を出発し、内浦湾を渡って東に進んだ。総員六百二十八人、第一陣は佐藤権左衛門、第二陣は蠣崎藏人、第三陣は松前儀左衛門として順次出発し、泰広がこれを統率した。権左衛門は途中所々の反夷を降伏させ、進んでビボクに至り、使を染退につかわして降伏を勧めたが、シャクシャインは躊躇して決せず、その子カンリリカの勧めにより、ようやく意を決して部下数十人を率い、刀を帯び、弓矢を携え、甲冑を着けて松前軍の陣営を訪れた。権左衛門は命じて武装を解かせ、おもだったもの十六名を招き、降伏したうちは生命は助けようというて償品を出させたところ、かれらは宝物とする大小の刀類、鍬先、鏑などを集めて提出した。権左衛門は松前の後軍の到着するを待ち、十月二十三日夜、和議の成立を祝うと称してかれらに酒を振舞い、酔ったのを見はからってにわかにかれを囲んでシャクシャイン、チメンバなど十四人を殺し、ウエンシルシほか一名をとりこにし、翌二十四日染退に進み、シャクシャインの砦を攻めて火をかけた。

泰広らは、最初はこの乱の根本は染退で、これを滅ぼしたならば他はおのづと平定するだろうと考えていたが、その後シャクシャインらは奥蝦夷地にのがれ、持久策に出るかもしれないという噂が立ち、平定が困難となるおそれがあると心配されたが、その以前に降伏させることができ一挙にくつがえすことができた。泰広らは閏十月十一日松前

城下に帰った。この役において反夷を殺した捕虜はたまたま捕虜にされたものも千四百人おびおび和人で反夷に殺された者のみならず市左衛門ほか二人はこれを斬り、庄太夫はとりこにしてビボクで火刑に処した。松前兵では陣没した者は一人、負傷して後死亡したものが三人にすぎなかった。この乱の勃発を聞くと、他国の浪人が松前に来て、従軍を願う者十一人におよんだが、藩はこれを許さず、うち一人は命にそむいて蝦夷地にはいろうとしたので、やむを得ず福島で打ち果した。

初め乱の急報が松前に達すると、種々の噂がとび松前の住民は大いに動揺し、津軽や南部にのがれようとひそかに準備をした者もあったが、藩はこれを禁じ、福山城の周囲に木柵（あるいは板塀という）を増設し、物見数か所を急設して万一に備え、また酒井左兵衛に雑兵約二百人を率いて亀田に駐屯させ、松前左衛門、蠣崎小左衛門、蠣崎次郎左衛門らに雑兵約五百人をつけて相沼内、熊石、関内の三か所を守らせた。

蝦夷に事変があると、松前藩に次いで直接の影響をこうむるものは津軽藩である。六月末日松前藩から蝦夷乱の報を受けると、急いでその対策を協議し、再度にわたって幕府に指揮を請い、八月十七日松前救援の幕命を受け、藩士杉山八兵衛を將とし、七百余（幕府への届書には五百人とする）を率いて援軍として松前に詰めさせ、藩主は出府途上から帰城して万一の際は自ら出陣する準備をし、また松前藩からの請により、鉄砲五十挺ならびに弾薬などを貸し与えた。九月五日八兵衛らは弘前を發し、八日鯉ヶ沢から福山に渡って専念寺に滞陣し、八兵衛はさらに国縫に進もうとしたが、松前藩の阻止にあい、やむを得ず東部大野村まで進み、染退の平定を聞いて福山に帰り、十一月七日福山を發して弘前に帰った。南部、秋田の二藩もまた幕命によって出兵の準備をし、南部藩は一隊の兵を野辺地に派遣したが、ついに渡海せず終った。九月幕府は松前藩に米三千俵を給与し、また松前におもむいた津軽藩兵五百

人に一日米五合ずつを給与した。

津軽藩蝦夷の状況を探る 津軽藩は蝦夷乱が起こったことを知ると、八月援兵派遣に先立って二人の藩士を松前に派遣してその状況を探らせ、二人は松前家役人と数十回の交渉を重ね、松前藩兵出征先まで出張して、蝦夷の様子を探ろうとしたが、松前藩は援軍に對してとつたと同様許さず、そのうちに乱が鎮定してしまった。しかし、その後の蝦夷情勢はぜひひこれを知る必要があったので、翌十年五月藩士牧只右衛門重清、秋元六左衛門吉重の二人に命じ、漂流船のふりをしてひそかに蝦夷地に渡り、探索させた。二人はおのおの目付、銃手、通辞蝦夷（津軽外ヶ浜宇鉄に住む蝦夷）、水主など數十人を率いて、表面は敦賀に行くことにして鯨ヶ沢を出帆し、只右衛門は西蝦夷地に、六左衛門は東蝦夷地におもむいた。只右衛門は深浦で風待ちし、六月十三日出発、進んで西蝦夷地おしよち（小樽市）に至り、途々数か所に寄泊して状況を探った結果、昨年西蝦夷地で和人を殺したのは松前藩の蝦夷に對する処置が宜しくなく、交易に不正が多くて、蝦夷などには不満にたえなかつたところへ、たまたまシャクシャインの誘いがあつたので、蜂起したものであることを明らかにすることができた。また現状をみると、蝦夷はなお静穏だとはいえないが、いづれも償品を出して事件を落着けようと希望しているらしく、また石狩では、昨年一人の和人も殺害しなかつたが、その酋長ハウカセはすこぶる強剛で、松前藩に對し強硬な態度をとり、現に石狩川に部下を集め茅屋三百を構え、藩兵の来るのを待ち、また宗谷およびルインシンの酋長はもし平和が回復しないで交易の途が絶えると、困難に陥ることを心配し、和睦を勧告するため、余市に來たことなどを知つた。只右衛門は帰途暴風にあい、関内に避難し、その地を守つていた松前藩の吏員に会い、むずかしい問題が起こりそうになつたが、七月二十七日、急に出帆して津軽に帰り、のち江戸に上つて老中にこの状況を報告した。これにひきかえ六左衛門は三厩、田名部を経て六月東蝦夷地三石付近に

至つたが、蝦夷舟三、四十隻に取り囲まれ、毒矢を射かけられ、通辞として伴つた蝦夷二人が捕えられたので、やむを得ず銃を放つてこれを打ち払い、他の地方を視察することもできずに津軽に歸つた。なお津軽藩はこの八月に二人の藩士を松前に派遣して状況を探らせ、翌々寛文十二年にも藩民材木屋長兵衛に命じて、菓子昆布調達を名として松前におもむかせ、蝦夷地の状況を聞き込み、これを報告させた。

## 二 蝦夷の服従

余党の鎮定 染退は滅したが、各地の余党はまだ平定せず、ことに石狩の酋長ハウカセを中心とした地方が不穩だつたので、寛文十年に兵をつかわして西蝦夷地を鎮定した。第一陣は松前左衛門広謙、第二陣は蠣崎主殿広隆、第三陣は松前甚兵衛が將となり、雑兵を合わせて約二百人を率い、余市に進み、松前泰広は関内に出張してこれを声援した。各地の蝦夷は償品を出して降伏したので、誓詞を出させ、牛王こぎ（起誓にもちいる護符）を焼いて吞ませ、服従を誓わせた。この年東蝦夷地においてもまた数百人から誓詞をとつた。起請文は左のような内容のものであつた。

### 起請文の事

- 一、從殿様、如何成儀被<sub>レ</sub>仰懸候とも、私儀は勿論、孫子一門並うたれ男女に不<sub>レ</sub>限、逆心仕間敷候事。
- 一、殿様え逆心を企申敷、御苦勞に罷成儀等申夷及承候は、随分意見仕、其上承引不<sub>レ</sub>仕候は、何卒通路罷成に於ては早々御注進可<sub>レ</sub>申上候事。附仲間出入御座候は、随分面々及手立申儀候は、取扱可<sub>レ</sub>申事。
- 一、殿様御用にて、しやも浦々罷通候は、少も如<sub>レ</sub>在仕間敷候。縦令しやも自分の用にて通り候とも、随分馳走可<sub>レ</sub>致候事。
- 一、從殿様、向後被<sub>レ</sub>仰出候通、商船へ我儘不<sub>レ</sub>申懸、互に首尾罷商可<sub>レ</sub>仕候。余所の国の荷物買取申間敷候。我國にて調申荷物も、

脇の国へ持参仕商売致間敷候。人の国にて取申候皮、干鮭我国へ持参仕商賣致者、跡々より仕付候通可<sub>レ</sub>致候事。

一、向後米一俵に付皮五枚、干鮭五束商売可<sub>レ</sub>仕候。新物、烟草、金道具に至るまで、米に応じ、跡々より高直に商売可<sub>レ</sub>仕候。荷物沢山に有<sub>レ</sub>之年は、一俵に皮類も干鮭も下直に商売可<sub>レ</sub>致候事。

一、殿様御用にて状使並御鷹送申儀、其外伝馬宿送昼夜に不<sub>レ</sub>限、少も如<sub>レ</sub>在任間敷候。御鷹の餌犬あたひ出し不<sub>レ</sub>申候共、無<sub>レ</sub>遅々<sub>一</sub>出し可<sub>レ</sub>申候事。

右の旨、私儀は勿論、孫子一門並うたれ男女に不<sub>レ</sub>限、少も相背申間敷候。若相背候者於<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之は、神々の蒙<sub>レ</sub>御罰、子孫長く絶果候。依て起請文如<sub>レ</sub>件。

寛文十一年三月、蠣崎藏人、松前主水、松前儀左衛門らが雑兵百七十余人を率いて、白老に出張し、蝦夷を処置し、償品を取り、誓詞を命じ、六月福山に帰った。八月一日クスリ、アッケシ、ノッサブの蝦夷が四百七十九人、船十七隻で白老に到着し、その後国縫まで来たとの報があったので、雑兵三百人を派遣して応対させたのもこの年であったらしい。

松前泰広は十年九月福山を発して江戸に帰り、十二月その功によって五百石の加増を受けたが、同十二年三月その子八兵衛嘉広、治郎兵衛兼広、主馬直広をもなつてふたたび福山に来て、六月蠣崎主殿らの率いる藩兵三百余人とともに国縫に出張した。シャクシャインにくみした浦河、幌別、襟裳、ヌカベツ、タモチの蝦夷が數十人來航して降伏し、付近ならびに奥蝦夷から商売に來た蝦夷なども多く集つたので、同じく誓詞をとり、蝦夷地はまったく平静もどつた。八月泰広らは福山を出発して江戸に帰つたが、次男治郎兵衛兼広は知内温泉で病没した。

蝦夷の服従 この乱によって東海岸は浦河、西海岸は増毛付近に至るまでの蝦夷はすべて松前氏に服従し、起請文によって、まったく松前氏に属し、松前氏に有利な交易を誓い、さらに進んでは公用の状使、鷹送、伝馬、宿送など

の労役に服し、鷹の餌犬を差出す義務を承服したばかりでなく、その他の蝦夷も他意なきを誓い服従を約したので、松前藩の蝦夷地に対する勢力はとみに伸長し、その支配力は漸次蝦夷の頭上に加わつていった。

### 三 寛政元年の蝦夷乱

奥蝦夷の剛強 松前藩は寛文九年蝦夷の乱を鎮定した後は、対蝦夷策に注意し、交易のためにつかわす者のほかは、なるべく蝦夷地に入らせない方針をとつた。和人と蝦夷との接触が多くなると、自然その摩擦も激しくなるからである。しかし、経済の発展は蝦夷に対し、消極的な態度に終始することを許さなかつた。寛文の蝦夷乱に奥蝦夷が平靜であつたのは、いまだその接触が多くなかつたからであらうが、元禄十四年東蝦夷地霧多布に大船をつかわし、根室、国後などの蝦夷に対する交易を開き、宝暦四（一七五四）年さらに船を国後につかわし交易を開始するにおよび、その接触はしだいに頻繁となつてきた。

ところが奥地の蝦夷は未だ松前藩と対抗するような勢力を持つていたらしく、正徳三年刊、和漢三才図会所載、蝦夷の図には厚岸から知床までの間に世不久良大カ国、伊古波加犬カ国、末曾久カ国などの記載があり、犬とはアイヌのあて字で、勢力のある酋長が支配していたことを語っている。しかるに彼等は、いまだ文化程度も低く、はなはだ強暴であつて、元文四年北海隨筆にも「惣じて東蝦夷は剛強にしてややもすれば松前の令を蔑にせり。キイタツプ、アッケシ、クスリ辺は別て御取扱六ヶ敷となり」といっているとおり、元文二（一七三七）年には霧多布の蝦夷が騒いだため交易船を派遣せず、宝暦八年七月には東蝦夷奥地納沙布のしあぶの蝦夷が二、三千人で宗谷の蝦夷を襲撃して六十余人を殺し二百余人を傷つけ、翌九年藩士を派遣して乙名を謝罪させた例がある。明和七（一七七〇）年には十勝の